

[シンポジウム記録]

日本スラヴ学研究会発足記念シンポジウム 第1部「スラヴ学の礎を築いた人々」

三谷 恵子

二十一世紀にはいってすでに十年以上が経ち、かつての東西対立の時代も歴史の過去へと遠ざかりつつある感がある。欧州統合とグローバル化という近年の潮流の中で、スラヴ語が広く使用されている中・東欧域の社会状況も、そしてそこで用いられる言語の実態も、大きく変わってきた。またそれとともに、言語文化を対象とする学術研究の環境も、人と人の交流拡大、資料の電子化、さまざまな研究ツールの普及などによって大幅に変化し、これまでになかった多くの可能性が見えてきた。しかしまた人文学全体が新たな学術的展開を求められ、課題や方法論の新しさが注目される今の時代にあっては、しばしば、本質的な問題や基本的なことがらが見過ごされてしまうという危険も潜んでいる。こういった時にこそ、研究の原点にもどる、古典に参照するという姿勢は重要になるだろう。そこで、日本スラヴ学発足記念シンポジウム（2012年6月23日東京大学本郷キャンパスにて開催）にあたり、『スラヴ学の礎を築いた人々』と題してスラヴ学の発展に多大な足跡を残した三名のスラヴ学者——チェコのドブロフスキー、ロシアのスレズネフスキー、ポーランドのスティベル——について、それぞれの地域の専門家（石川達夫、服部文昭、森田耕司）に報告をお願いした。

中・東欧圏の言語文化の大部分は、近代以後のこの地域での民族意識形成と不可分に成り立ち、また二十世紀を通してさまざまな政治的抑圧や社会的混乱を体験しながら、しかしなおそうしたもののさえを成熟の媒体とするかのように育ってきたといえる。文学的創造、「標準語」の形成と発展、そしてまたあらゆる言語活動の基盤となる自分たちの言語そのものについての関心はいずれも、スラヴ人あるいは中・東欧地域に住む人々が、自分たちの生きる地域の歴史や系統、また民族的主体性を追求しようとした動きと関連づけられるものであろう。チェコのドブロフスキーによって先鞭をつけられたスラヴ文献学は、19世紀の印欧語比較言語学の成果を参照しつつ、同時にこれに貢献する形で発展し、スラヴ語の起源からそれぞれの言語への分岐の過程を明らかにしてきた。後にロシア文献学の世界で大きな功績を残すことになるスレズネフスキーは、1939～42年の間にスラヴ各地をくまなく巡回し、各地の言語や文化を記録して同時代以後のスラヴ語研究者への手引きとした。こうした蓄積は、スラヴ諸語の地理的分布と相違、また言語間に生じる接触や混濁への関心を呼び起こし、スラヴ方言学の発展を導いた。ポーランドに20世紀に現れたスティベルは、この系譜を受

け継ぎ、主に西スラヴ世界の研究を充実させた功績者である。

しかしながら「スラヴ」という言語系統的なつながりは必ずしも民族的、あるいは文化的連帯とは同一でなく、文化的価値観の違いや政治的対立によってかえって言語間の差異化が図られるといった面もあった。ここにとりあげた研究者たちによって築かれ、今日に至っているスラヴ学は、冒頭に述べたような現代の社会状況の中で実に多様な局面を見せているが、同時にそれはまた、石川達夫氏が指摘するように、「スラヴ学」という枠においてとらえることのできる学問が何であるのか、という根源的でありかつ今日的な問題を我々に問いかけているともいえるだろう。

ドブロフスキーとスラヴ学——スラヴ学の勃興と衰退？——

石川 達夫

「スラヴ学の創始者」ヨゼフ・ドブロフスキー（1753～1829）は、農民出身の軍人を父として、ハンガリーに生まれた。初めはドイツ語の環境の中で育ち、ギムナジウムに入った頃、チェコ語を覚えた。プラハの大学とブルノのイエズス会の学寮で学び、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語などを修得し、文献学や哲学の素養を身につけた。その後、プラハの大貴族ノスティツ家の家庭教師となり、そこで歴史家ペルツル（1734～1801）と接した。ペルツルらの影響もあって、ドブロフスキーはスラヴ語とチェコ史に関心を向けるようになった。

一般的に言って、18世紀後半から始まった「チェコ民族再生運動」期においては、歴史学と並行するようにチェコ語についての言語学的研究が進められた。ドブロフスキーも『詳解チェコ語文法』（1809年）を著したが、チェコ語の体系を確定する際に、チェコ語以外のスラヴ語、とりわけ古代教会スラヴ語を参照し、比較するという方法を用いた。そして、1822年には『古代教会スラヴ語の基礎』を出した。彼は、その研究の射程を古代教会スラヴ語も含めたスラヴ諸語一般の研究にまで広げた。

チェコ語研究は自然なことに、チェコ語を用いた文学についての研究と結びつき、ドブロフスキーは文学史的な著作や、チェコ詩についての言語学的研究と結びついた韻文研究も著した。さらに、チェコ語とチェコ文学研究はやはり自然なことに、民衆の言語文化への関心とも結びつき、フォークロア研究や考古学的研究も著した。

このように、「スラヴ学の創始者」と言われるドブロフスキーの学問的著作は多岐にわたっている。

チェコにおいて「チェコ民族再生運動」と結びついて勃興したスラヴ学は、さらにイデオロギー的に汎スラヴ主義と結びついて発展した。しかしながら、その後それぞれのスラヴ語の標準語が確立し、同時に各スラヴ民族の民族的アイデンティティが確立し、汎スラヴ主義も衰退してくると、スラヴ学は次第に個々のスラヴ語や、スラヴ文学・文化の個別的な研究に分解していった。

このような傾向に対して、ウィーン・スラヴ学派を代表するクロアチア人のスラヴ学者ヴァトロスラフ・ヤギッチ（1838～1923）が警鐘を鳴らした。ヤギッチは、一つの全体としてのスラヴ人についての特別で統一的な学問分野としてのスラヴ学が、個々のスラヴ民族の言語や文学の研究への特殊化によって脅かされていると考えた。

ヤギッチが指摘したようなスラヴ学の分解傾向は、その後さらに進み、スラヴ学は、一方では個々のスラヴ語やスラヴ文学・文化の個別的な研究と、他方ではもはやスラヴに限定しない比較言語学や比較文学・比較文化に移行してきたのではないかと。そして、ドブロフスキー的なスラヴ学から有効な学問として残るのは、もっぱらスラヴ比較言語学になったのではないかと。それ以外の研究については、一つのスラヴ語なりスラヴ文学なりに関係していれば、一応広い意味でのスラヴ学に含まれると見なさざるをえないのではないかと。

だがまた、ヤギッチが鳴らした警鐘もやはり念頭に置く必要があるのではないかと。

つまり、今日のスラヴ学は、互いに関連のない研究の寄せ集めで良いのかどうか、あるいは「スラヴ学」という名称が示唆するような、より広いパースペクティブのもので何らかの有機的関連を持つ研究を行うべきなのかどうか、もし後者であるとすれば、スラヴ比較言語学以外の分野でいかなる研究をなしうるのかも考えるべきではないだろうか？

スレズネフスキーとスラヴ学

服部 文昭

19世紀初頭のロシアではスラヴ民族の文化や歴史に対する関心が高まったが、それは外国の著作の抄訳などによって満たされていた。スラヴの言語を実際に学ぼうという強い意欲も、大学のスラヴ学の講座も、ロシアにはまだ無かった。ロシア最初のスラヴィスト、ヴォストロコフ（1781-1864）は、大学という学界には属しておらず幾つかのスラヴ語を独学で身につけた。政府は民族解放と文化復興の運動を自

身にも役立てるべく上からの改革を急いだ。1835年、新しい大学令施行で「スラヴ諸語の歴史と文学」の講座が開設され、教師となるべきスラヴィスト養成のために若く才能豊かな人々を外国に派遣することとなる。各大学の候補は、モスクワ大学：Осип Максимович Бодянский (1808-1877)、ペテルブルグ大学：Петр Иванович Прейс (1810-1846)、ハリコフ大学：Измаил Иванович Срезневский (1812-1880)、カザン大学：Виктор Иванович Григорович (1815-1876) で、この人選は成功であった。皆、ロシアにおけるスラヴ学の強固な土台を築いた。

スレズネフスキーは、1812年6月1日、新暦なら、13日、ヤロスラーヴリのデミードフ学園教授の家庭に生まれる（直後、父はハリコフ大学に転動するも、1819年に亡くなる）。ハリコフ大学を1829年に卒業し官職に就き、やがてハリコフ大学経済学・統計学講座で働き始める。1838年、博士論文を提出したが、基本的なテーゼがあまりに異例だとこのことで、はねつけられた。そこで、少年期からフォークロアに惹かれ、その方面の著作で名を知られるようになっていた彼はスラヴ学講座の主任を担うという提案を受諾し、スラヴの土地を巡る長い旅へ出発した。

1839年9月17日にハリコフを出発。まる三年間の旅であった。ボジャンスキーと比べ、夏は必ず徒歩旅行を実施するなど、よりフィールドワークの要素が強い計画となった。旅行中に、様々なスラヴの土地での印象を何度も母親に書き送っている。そこから、スラヴの土地々々での暮らしぶりや、一人ひとりの学者の生活について多くの興味深い観察を汲み取ることが出来る。1842年秋ハリコフ大学で、スラヴの諸文章語の情勢に生じつつある変化を考慮した講義によって教授活動を開始した。1846年、ロシアで最初のスラヴ・ロシア文献学の博士となる：«Святителища и обряды языческого богослужения древних славян по свидетельствам современников и преданиям»。1847年1月にペテルブルグへと移る。じきに、ペテルブルグ大学スラヴ学講座の教授に任ぜられた。初めは、ハリコフ大学と同じ方針で講義をしていたが、1848年のフランスでの事件以降、他のスラヴ諸民族からの影響を恐れる文部省の意向もあり、扱うテーマなどを言葉や習俗に絞り込んだ。

1849年2月8日、ペテルブルグ大学の記念祭で、«Мысли об истории русского языка» という講演を行う。ロシア文章語をめぐる論争以来、社会一般からのロシア語の歴史への関心が高まっていた。ヴォストーコフは古代教会スラヴ語を、スラヴ祖語やロシア語と明確に区別して、その最古の諸特徴や他の諸スラヴ語との関係を明らかにし、その主要な歴史区分もしていたが、この成果を受け継ぐ者が現れなかった。ここに至って初めて、本格的な比較言語学に基づく音論や形態論を含むロシア語史の研究が開始された。

50年代からは、一生をかけて、古代ロシア文語の文献の発見、記述・研究、刊行に取り組み、また、古代ロシア文語辞典の編集に取り組んだ(死後に出版された)。ヴォ

ストーコフが力を入れた古写本の調査・記述と辞典の編纂という王道にスズネフスキーも従った。やがて、ヤギッチ (1838-1923) により現代的なスラヴ学が誕生するが、スズネフスキーは、ドブロフスキー (1753-1829)、ヴォストーコフ、シャファジーク (1795-1861) と続くスラヴ学の本流をヤギッチへと繋いだ重要な存在である。[ニコライ・コンドラシヨーフらの研究に依った]

ステイベルとスラヴ学

森田 耕司

はじめに

ポーランドのスラヴ言語学者であるズジスワフ・ステイベル Zdzisław Stieber (1903-1980) の生涯を振り返ると、ヤギェロン大学時代 (1921-37)、ルヴフ大学時代 (1937-45)、ウッチ大学時代 (1945-52)、ワルシャワ大学時代 (1952-66)、ポーランド科学アカデミー・スラヴ学研究所時代 (1954-73) に大別することができる。そこで、本稿では彼の生涯を各時代別に見ていくことにより、ポーランドにおけるスラヴ学発展の経緯を辿る。

1. ヤギェロン大学時代 (1921-37)

ステイベルは 1903 年 6 月 7 日、シチャコヴァ (オーストリア=ハンガリー帝国領) 生まれ。クラクフで育ち、1921 年ヤギェロン大学に入学。学生時代の 1926 年、化学から言語学へ進路変更し、Kazimierz Nitsch のもとで方言学を学んだ。Jan Rozwadowski, Jan Łoś, Witold Taszycki など、いわゆる「クラクフ言語学派」の教授陣からも多大な影響を受けたようである。1928 年に修士号 (ポーランド語学)、1929 年に博士号 (スラヴ文献学)、さらに 1934 年には教授資格 (スラヴ言語学) を取得。1935 年助教授に就任し、スロヴァキア語などを教授。研究面では、スロヴァキア方言、ソルブ方言、ウクライナ方言およびポーランド国内の方言研究に従事。言語境界の問題が常に関心の中心にあった。この時代の主な業績としては、Stosunki pokrewieństwa języków łużyckich (1934), Geneza gwar łaskich (1934), Z pogranicza językowego polsko-białoruskiego (1938), Sposoby powstawania słowiańskich gwar przejściowych (1938) があり、レムコ地域でのフィールド調査にも着手。

2. ルヴフ大学時代 (1937-45)

1937年、ルヴフ（ヤン・カジミエシュ）大学スラヴ文献学科に着任。1939-41年と1944-45年、ルヴフ（イヴァン・フランコ）大学ポーランド語学科教授を務めた。ドイツ占領下の1941-44年、ルヴフで秘密大学教育（ヤン・カジミエシュ地下大学）にも参加。ルヴフ近郊のボイコ地域で、Stefan Hrabecとともに方言調査を実施。戦争により調査記録の大半は焼失したが、論文を数点発表。焼失を免れた調査記録をウッチへ持ち帰った。

3. ウッチ大学時代 (1945-52)

戦後、42歳にして正教授及びポーランド学術アカデミー（PAU）準会員に就任。新設されたウッチ大学において、ポーランド語学科創設に尽力。学内にポーランド学図書館も設置。ウッチ学術協会では言語学部門の創設にも貢献。戦前すでに開始していたレムコ方言地域の地名学に関する研究成果を発表。この時代の主な業績としては、Toponomastyka Łemkowszczyzny (1948-49), Atlas językowy dawnej Łemkowszczyzny (1956-64)のほか、ポーランド語発達史や歴史的音韻論に関心を寄せていたため、Rozwój fonologiczny języka polskiego (1952)など。カシュブ語研究の萌芽時代でもあった（1951年、Karol Dejna, Witold Śmiechとフィールド調査を開始）。

4. ワルシャワ大学時代 (1952-66)

1952年、ワルシャワ大学スラヴ文献学科に着任。1953-66年、学科主任として、学科の専門領域を従来のチェコ語学から、ブルガリア語学、セルビア・クロアチア語学へと拡大。授業では、すべてのスラヴ語に触れつつも、特にチェコ語、スロヴァキア語、ソルブ語の講義に情熱を注ぎ、スラヴ諸語比較対照文法の講義も行った。研究成果に基づいた教科書類も積極的に執筆：Zarys dialektologii języków zachodniosłowiańskich (1956), Gramatyka historyczna języka czeskiego (1957) [Tadeusz Lehr-Splawińskiと共著], Zarys gramatyki porównawczej języków słowiańskich (1969)などがある。また、ポーランド語音韻論研究も発展させ、Historyczna i współczesna fonologia języka polskiego (1966)も出版。

5. ポーランド科学アカデミー・スラヴ学研究所時代 (1954-73)

ワルシャワ大学着任とほぼ同時期に、ポーランド科学アカデミーにおける言語学やスラヴ学の研究機関創設に参加。1954年、カシュブ語とチェコ語研究室を開設し、代表を務めた。主な業績としては、Atlas językowy kaszubszczyzny i dialektów sąsiednich (1964-78)がある。1956年準会員、1961年正会員に就任。ポーランド語音韻論研究の英語版も発行：The Phonological Development of Polish (Ann Arbor 1968), A Historical Phonology of the Polish Language (Heidelberg 1973)。定年退職する1973年まで所長を務

めた。言語学、文学、歴史部門を組織し、スラヴ学研究所附属図書館を創設。ポーランド科学アカデミーの言語学委員会やスラヴ学委員会、ポーランド言語学会などで要職を歴任。1980年10月12日、ワルシャワにて死去。

まとめにかえて

ステイベルの研究分野は多岐にわたるが、「スラヴ方言学」(クラクフ・ルヴフ)、「ポーランド語発達史」(ウッチ)、そして「スラヴ諸語比較対照文法」(ワルシャワ)の3分野に大別することができる。研究の特徴はというと、著書・論文執筆にあたっては、大学1年生から専門家までを対象とし、最も複雑な問題を最も簡潔な方法で記述しようと心がけ、総合的かつ短編という簡明性、言語事実の歴史的関連性と相互関係を重視する傾向、そして既存の原稿を何度も見直し、洗練・熟成させていく姿勢などが、生涯通して一貫しており、特筆に値する。